

**八尾市文化財調査報告 28
平成 4 年度公共事業**

八尾市内遺跡平成 4 年度発掘調査報告書Ⅱ

1993. 3

八尾市教育委員会



は　じ　め　に

大阪平野の東側、生駒山麓に位置する八尾市は、古代は河内潟に望み、豊かな山野を控えて、大和との交通の要所として発達してきました。このことは、近年の発掘調査の多大な成果からも容易に伺うことができます。このようなまさに遺跡の宝庫ともいえる街であるだけに、開発事業にさきだつ、遺構確認調査がますます重要な意義をもってきております。本市ではこのような現状を踏まえ、文化財の調査、保存、啓発をすすめていくために、文化財室を文化財課として昇格させ、より一層の文化財保護行政の充実を計ってまいりました。

本書は平成4年度に行なった調査の成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として利用され、また、八尾市の貴重な埋蔵文化財を理解していただく一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、これらの調査にあたり、御協力と御理解を賜わりました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

八尾市教育委員会

教育長 西 谷 信 次

例　　言

1. 本書は、平成4年度に八尾市教育委員会が公共事業に伴い八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財課（課長　田中弘）が主体となって実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財課の米田敏幸、潜斎、吉田野乃が担当し、調査にあたった。
4. 本書は巻末に記載した調査一覧表のなかで、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、潜、吉田が執筆・編集を行った。
6. 現地調査・報告書作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。

横山妙子、米原洋文、中西隆子、横山典子、片山武志、堀本昌宏、田中祐子、福樹幹祐、常藤津久美、清水妙香、藤中貴子、松島賢治、濱田千年、三笠駿一

目 次

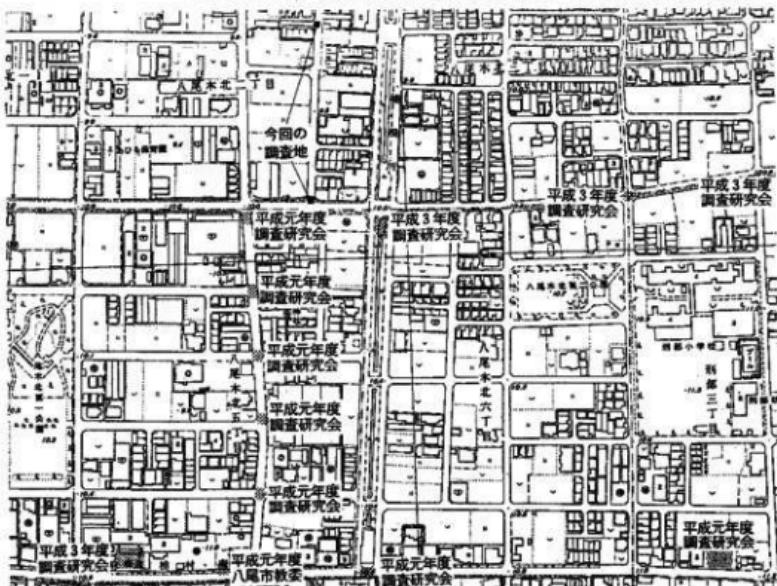
1. 中田遺跡 (91-353) の調査	1
2. 中田遺跡 (91-354) の調査	5
3. 中田遺跡 (91-503) の調査	8
4. 恩智遺跡 (91-540) の調査	13
5. 成法寺遺跡 (92-561) の調査	17
6. 東弓削遺跡 (91-373) の調査	20
7. 太田川遺跡 (92-226) の調査	25
8. 萱振遺跡 (92-359) の調査	28
9. 跡部遺跡 (92-331) の調査	30
10. 中田遺跡 (92-312) の調査	32
11. 木の本遺跡 (92-070) の調査	38
12. 中田遺跡 (92-314) の調査	41

図 版 目 次

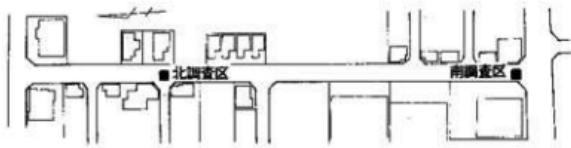
図版 1 中田遺跡 (91-353)	S D - 2 瓦器椀出土状況
成法寺遺跡 (91-561)	調査区全景 (南より)
図版 2 中田遺跡 (91-503)	第 1 調査区全景 (南より)
	S P - 2
図版 3 中田遺跡 (91-503)	S F - 2
	第 1 調査区東壁
図版 4 東弓削遺跡 (91-373)	ピット
	土杭状遺構
図版 5 中田遺跡 (92-312)	第 1 遺構面全景 (北より)
	第 2 遺構面全景 (北より)
図版 6 中田遺跡 (92-312)	瓦器椀出土状況
	軒丸瓦出土状況
図版 7 中田遺跡 (91-354)	91-354出土遺物
中田遺跡 (91-503)	91-503出土遺物
図版 8 東弓削遺跡 (91-373)	出土遺物
図版 9 恩智遺跡 (91-540)	91-540出土埴輪
中田遺跡 (92-312)	92-312出土遺物
図版10 中田遺跡 (92-312)	92-312出土遺物

1. 中田遺跡（91-353）の調査

- | | |
|---------|--|
| 1. 調査地 | 八尾木北2丁目地内 |
| 2. 調査期間 | 平成3年12月10日 |
| 3. 調査契機 | 公共下水道工事（第34工区） |
| 4. 調査方法 | 人孔部分（2m×2m）を対象に2ヵ所調査区を設定し、各々を北調査区、南調査区と仮称した。北調査区は地表下1.25mまでを、南調査区は地表下0.6mまでを機械で、以下をそれぞれ人力を併用して地表下2.1m前後まで掘削を行った。 |
| 5. 基本層序 | 北調査区 — 旧耕作土は地表下0.95mでみられる。しかし、南調査区では地表下0.4mにあることから、調査地は南から北に向かって傾斜していたことがわかる。地表下1.4m前後では⑤灰白色粘質土をベースとする畦畔状の高まりが確認できることから耕作面の可能性が指摘できる。だが、ベース面となる⑥層及びそれを覆う④褐色粘質土層で遺物が出土しておらず、時期などは不明である。ただ、第4層では炭化物が層中 |



第1回 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査位置図 (1/100)

に混じっていた。⑤層以下では⑥～⑧層まで粘土層が堆積しているが、遺物が出土しているのは⑦灰色粘土層だけである。しかし、土師器の破片1点のみで時期は明確ではない。しかし⑧暗灰色粘土は南調査区との対比から古墳時代墳の堆積層と推定できる。

南調査区 — 旧耕作土直下の③暗緑灰色粘砂層から遺物はみられる。地表下0.7mの⑨淡灰褐色粘土上面からは溝1が掘り込まれており、その出土遺物から鎌倉～室町時代の遺構面と考えられる。また、その下部の⑩灰色粘土でもピットを1基確認しているが、遺物はみられず時期は不明である。そして地表下1.2mの⑫淡茶灰色砂質土層・⑬褐灰色粘砂層はいずれも鎌倉時代の遺物包含層であり、⑫層上面では溝2が掘り込まれており、出土遺物から鎌倉時代初頭の遺構面といえよう。地表下1.55m前後の⑧暗灰色粘土層では遺物は北調査区同様出土していないが、調査区の北側で⑧層を切り込む形で⑭暗茶灰色粘質土がみられ、この層中より、古式土師器の破片が出土していることから古墳時代の包含層とみられる。

6. 造構・遺物

〔溝1〕 ⑩層上面で検出。東西方向に伸びる南肩のみ検出できた。長さ1.65m、最大幅0.45m、深さ0.22mで埋土は暗灰緑色粘砂である。出土遺物は瓦器、土師器、東播系の擂鉢、火舎、瓦質羽釜(1)、1枚作りの平瓦等である。瓦質羽釜(1)は内湾する口縁部に3乗の凹線を巡らしている。内面は上部1/2は横方向に板ナデ調整し、以下をヨコナデし、外面ヨコナデを行っている。

〔ピット〕 ⑩層上面で検出。円形を呈し、最大直0.22m、深さ0.18mを測る。埋土は⑪灰白色粘砂である。

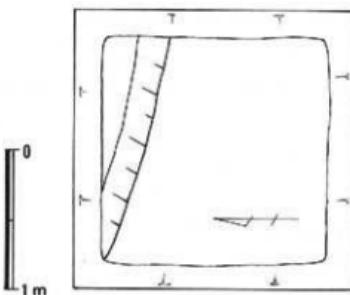
〔溝2〕 ⑫層上面で検出。東西方向に伸びる北肩のみ検出できた。長さ1.3m、最大幅0.75m、深さ0.45mで埋土は⑯灰茶色粘砂と⑮明灰色粘土であるが、特に⑯層には植物遺体が多くみられた。出土遺物は⑯

層で土師器皿、瓦器の破片が、⑩層で瓦器（2・3）、土師器皿（4～6）、平瓦等である。瓦器（2・3）は和泉型に属するもので、（2）は口径15.1cm、器高4.6cmを測る。外面は下半部をユビオサエの後ナデ、上半部にヨコナデを行い、内面は見込みに粗い平行状暗文を施している。尾上氏の編年のⅢ-2期に相当する。（3）は口径15.6cm、器高4.7cmを測る。外面は下半部をユビオサエの後ナデ、上半部にヨコナデを行い、内面は見込み部に格子状暗文を施す。尾上氏の編年のⅢ-1期に相当するか。土師器皿（4～6）の口径は、順に8.3cm、8.5cm、8.6cm、8.8cmを測り、口縁部の調整手法は（4）は1段のヨコナデと面取り、（5）は2段のヨコナデと面取り、（6・7）は1段のヨコナデであるが、（7）のみ内外面に指頭痕を残す。

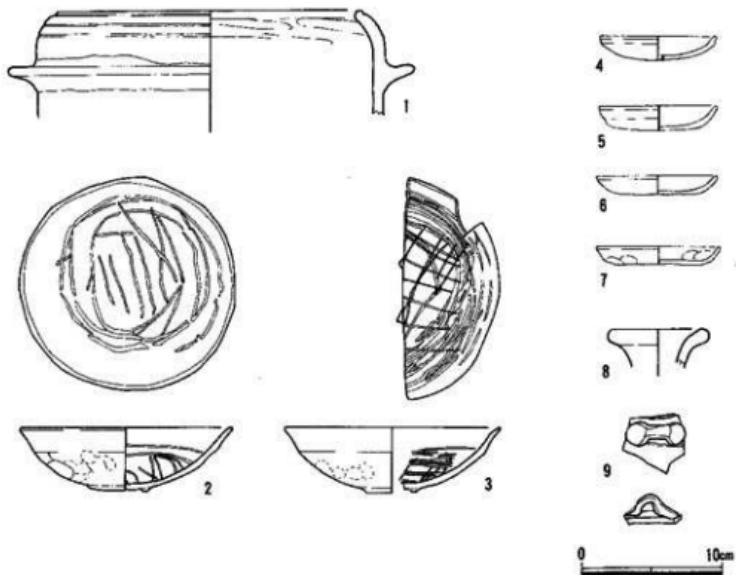
次に⑩褐灰色粘砂層から出土した須恵器の壺の口縁部（8）と青磁壺



第3図 基本層序模式図 (1/40)



第4図 南側調査区、溝-1 (1/40)



第5図 出土遺物実測図 (1/4)

(9)についてであるが、(8)は口径 6.8cm、口縁端部は外方に肥厚して丸みを帯びる。(9)は越州窯系青磁の四耳壺の耳部分である。外面は緑黄色、内面は黄緑色の色調を呈す。

7. 備 考

今回の調査は下水道工事の人孔部分 ($2\text{m} \times 2\text{m}$) という狭い範囲で行ったものであるが、11世紀から15世紀にかけての遺構・遺物が出土し、良好な資料となった。これまで中田遺跡は弥生時代末期から古墳時代にかけての遺構が主として調査されてきており、多大な成果を挙げてきたが、ここ1~2年中世の遺構検出が目立ってきている。その幾つかは現在の由義寺を中心として西にみられ本調査地も由義寺から西北へ 150m の地点で行ったのである。今後周辺の調査の増加に伴う、資料の蓄積により中田遺跡の中世像が明らかになることを期待したい。 (浦)

8. 参考文献

尾上 実「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年

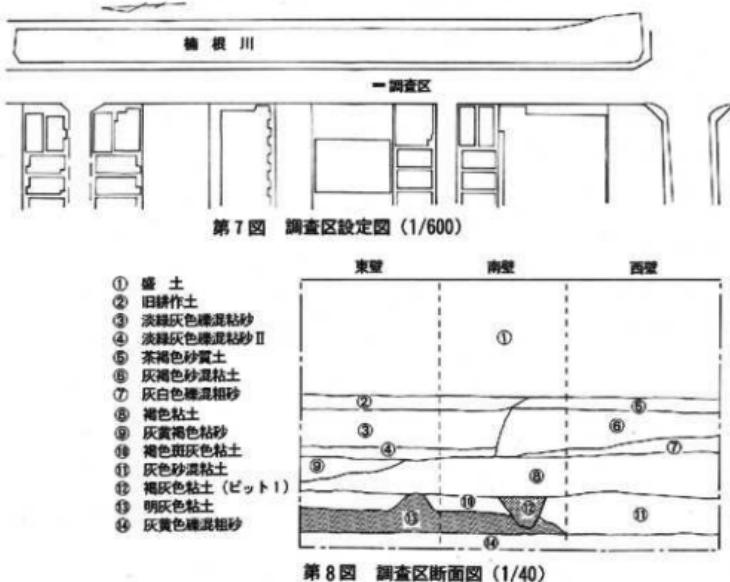
2. 中田遺跡（91-354）の調査

- | | |
|---------|--|
| 1. 調査地 | 八尾木北2丁目地内 |
| 2. 調査期間 | 平成3年12月13日 |
| 3. 調査契機 | 公共下水道工事(第36工区) |
| 4. 調査方法 | 管路(幅1m)途中で、任意に調査区を設定し、地表下1.8m前後まで調査を実施した。調査は地表下1.2mまでを機械だけで、以下0.6mを人力も併用して掘削を行った。 |
| 5. 基本層序 | 東・南・西壁の断面を観察したが、いずれも異なった堆積を示しており、展開した図(第8図)で説明する。

盛土を除去すると、南壁中央より西では第1層茶褐色砂質土が現れるがそれを切り込むように東壁では旧耕作土がみられる。第2層やはり南壁中央より西では灰褐色砂混粘土・灰白色礫混粗砂だが、東壁では淡緑灰色礫混粘砂・淡緑灰色礫混粘砂IIが堆積している。第4層はいずれの壁でも褐色粘土がみられるが、東壁では黄灰褐色粘砂が切り込んでいる。 |



第6図 調査地周辺図(1/5000)



第5層は褐色班灰色粘土が調査区中央より東でみられるが、検出したピット1を境にして灰色砂混粘土が堆積している。この第5層上面が遺構面となる。第6層は明灰色粘土で西壁ではみられない。この層からは須恵器の壺、土師器の甕、高杯の柱部の破片等が出土しており、古墳時代後期の包含層となる。第7層は灰黄色礫混細砂でこの上面でピット2が検出でき、また、須恵器の甕、蓋灰等の破片がみることができ、第2の遺構面になる。

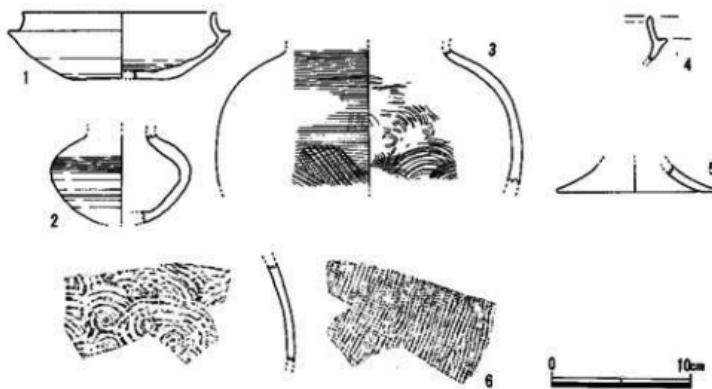
6. 遺構・遺物

〔ピット1〕

第5層褐色班灰色粘土上面で検出。幅0.34m、深さ0.22m。埋土は褐色粘土で、須恵器の杯身(1)、壺の口縁部、甕等の破片とともに小動物の骨片が出土している。(1)は口径13.8cm、淡灰色を呈する。中村氏編年の1型式5～II型式2段階に比定できよう。

〔ピット2〕

第7層灰黄色礫混細砂上面で検出。幅約0.22m、深さ0.16m。埋土は暗灰色砂混粘土で、内外面ハケ調整の土師器の破片が出土している。



第9図 出土遺物実測図 (1/4)

(明灰色粘土層出土遺物)

壺の体部（2）は径10cmで、内面に漆が付着しており、外面上部にはカキ目痕を施す。

（灰黄色礫混細砂）

壺体部（3）は径20.4cm、外面上部にやはりカキ目痕を施している。

下部はカキ目の上からタタキ調整を行っている。杯身（4）はたちあがりの端部に段を有する。（5）は格子叩きを施している壺の肩部である。

7. 備 考

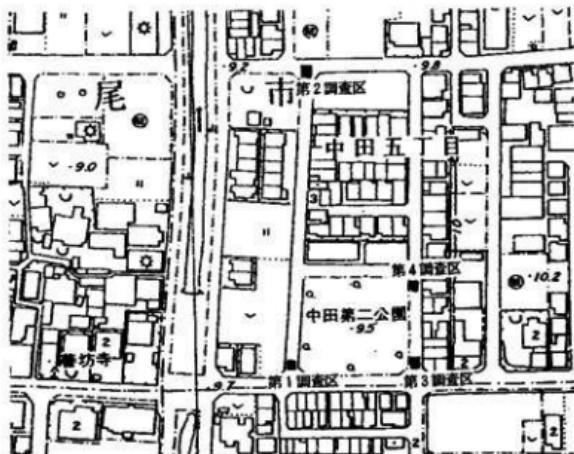
今回の調査では6世紀前葉に位置付けられる遺構を検出した。特にピット1では小動物の骨片が出土し、また包含層中から漆の付着した壺が出土したことから祭祀に関連する遺構であることが考えられる。（淮）

3. 中田遺跡（91-503）の調査

1. 調査地 中田5丁目75-107
2. 調査期間 平成4年1月9・27日
3. 調査契機 公共下水道工事（第30工区）
4. 調査方法 人孔部分（2m×2m）を対象に4ヶ所調査区を設定し、各々第1調査区～第4調査区と仮称した。それぞれも調査区は地表下約1mまでを機械で、以下を人力を併用して地表下1.8～2m前後まで掘削を行った。
5. 基本層序 ここでは遺構・遺物が出土した第1調査区と第2調査区を中心に述べていく。
- 第1調査区 約0.67mの盛土を除去すると④淡灰色粘質土層がみられるが、それを②旧耕作土と③暗緑灰色粘砂が切り込むように堆積しているのが確認できた。近世～近代の耕作地として整地されたものである。地表下0.8m（TP + 8.8m）前後の⑤褐色粘質土は瓦器、土師器、須恵器等の破



第10図 調査地周辺図 (1/5000)



第11図 調査区設定図 (1/2500)

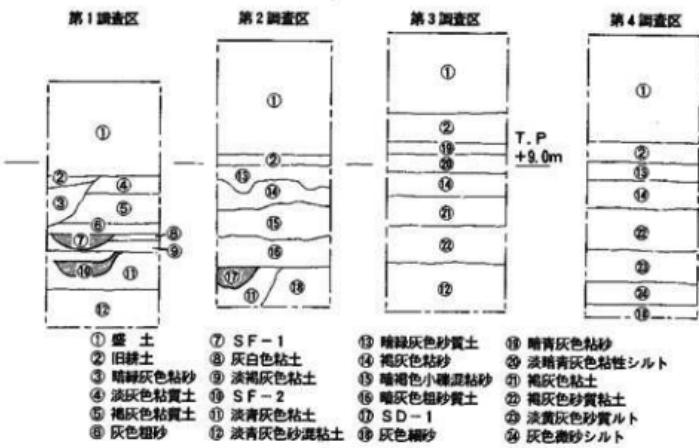
片が出土しており、中世の包含層とみられる。旧大和川の洪水による堆積層とみられる⑥灰色粗砂を取り除くと、地表下 1.1m (TP + 8.5m) 前後に⑧灰白色粘土をベースとする古墳時代初頭の遺構面が確認できた。そして、地表下 1.25m (TP + 8.35m) 前後の淡青灰色粘土が同時期の遺構面となる。

第2調査区

盛土、旧耕作土とその床土である⑬暗緑灰色砂質土を除去すると地表下 1.0m (TP + 8.9m) 前後で、⑭褐色粗砂がみられる。この⑭層には須恵器、土師器の破片が若干含まれている。⑮暗褐色小礫混粘砂では古墳時代後期に比定できる遺物が出土している。そして地表下 1.43m (TP + 8.5m) 前後の⑯暗灰色粗砂質土は庄内甕とV様式系の甕を多く包蔵している古墳時代初頭の遺物包含層であり、0.24mの厚さで堆積している。この⑯層の下部ではやはり旧大和川による堆積層とみられる⑰灰色細砂層を切り込む形で古墳時代初頭の遺構面となる⑮淡青灰色粘土が調査区中央から南側（第1調査区の方向）に堆積しており、ここで遺構を検出した。

第3・4調査区

⑯層を確認することができたが、遺物はみられなかった。それ以下で



第12図 基本層序模式図 (1/40)

は上述の調査区とは幾分異なった堆積を示しているが、第3調査区では⑫層が第4調査区では⑯層がそれぞれ最下層で確認された。

6. 造構・遺物

第1調査区

(⑧灰白色粘土上面) ピット4基、焼土坑1基が検出した。このうち遺物が出土したのはSP-1、SP-2、SF-1である。

< SP-1 >

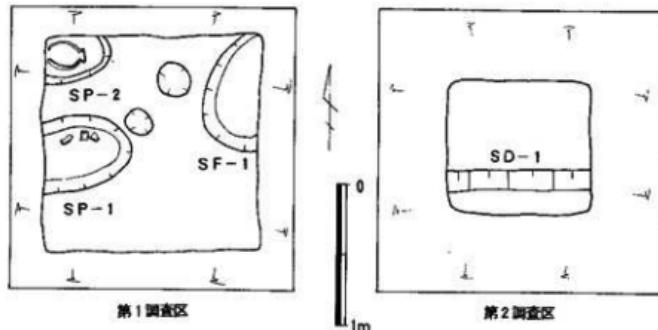
やや梢円形を呈すると思われるピットである。短径0.53m、長径は検出できた部分で0.64m、深さ0.18mである。埋土は灰色粘質土で、庄内期の甕(1)等が出土している。

< SP-2 >

ほぼ円形と呈するピットと思われるが、1/3が調査区外にでるため大きさは不明。深さは0.15m。埋土は暗灰色粘砂で、布留式古相に比定できる甕(3)が出土している。(3)は最大径が中位ある球形に近い体部をもち、口縁端部は内方へ若干肥厚する。体部外面はハケ調整がみられ、内面はヘラケズリを施し、底部付近には指頭圧痕がみられる。

< SF-1 >

梢円形を呈すると思われる土坑であるが、1/2が調査区外に至るために全容は不明であるが、断面では0.79m、深さは0.14mを測る。埋土は非常に多くの炭を含んでいる淡灰黑色粘土である。遺物は高杯の裾部、有



第13図 調査区平面図 (1/40)

段鉢 (2・4) 等が出土している。

(①淡青灰色粘土面) 焼土坑1基を検出した。しかし、遺構の上部分
1/3は一部しか確認することができなかった。

< SF - 2 >

やや橢円形を呈すると思われるが、やはり大半が調査区外に至るため全容は不明であるが、断面では、0.89m、深さは0.2m、を測る。埋土はSF-1と同じで多量の炭を含んでいる淡灰黒色粘土である。遺物は高杯の杯部(5)の他に器台、小型丸底壺、庄内甕の破片が出土している。

第2調査区

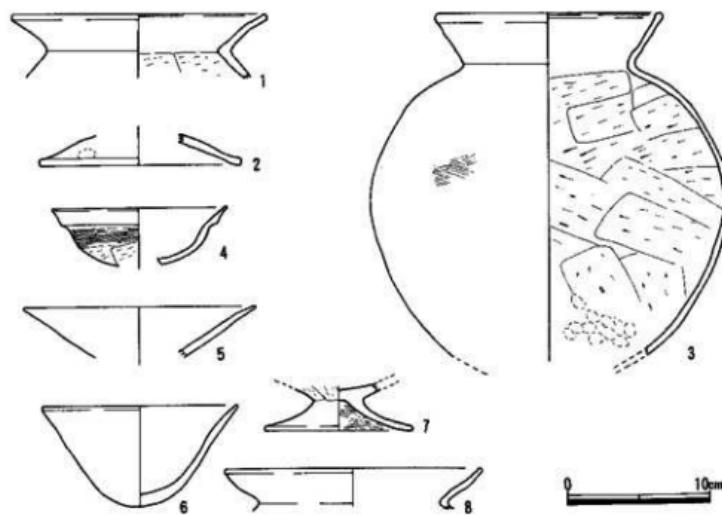
(①淡青灰色粘土上面) 溝1条(SD-1)を検出した。

< SD - 1 >

東西に伸びる溝で、北側の肩のみ検出した。検出長1m、幅0.35m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色粘質土。上述したが、この遺構面は⑩灰色細砂層を切り込む形で遺存している。台付き鉢と思われる台部分と緩やかに内湾する口縁部を持つ甕(7・8)等が出土している。

{包含層出土遺物}

(6)は9層淡灰褐色粘土層から出土した鉢で、口径13.7cm、器高7.1cmで、底部は丸くなっている。調整は不明。布留式古相に概ね否定できよう。



第14図 出土遺物実測図 (1/4)

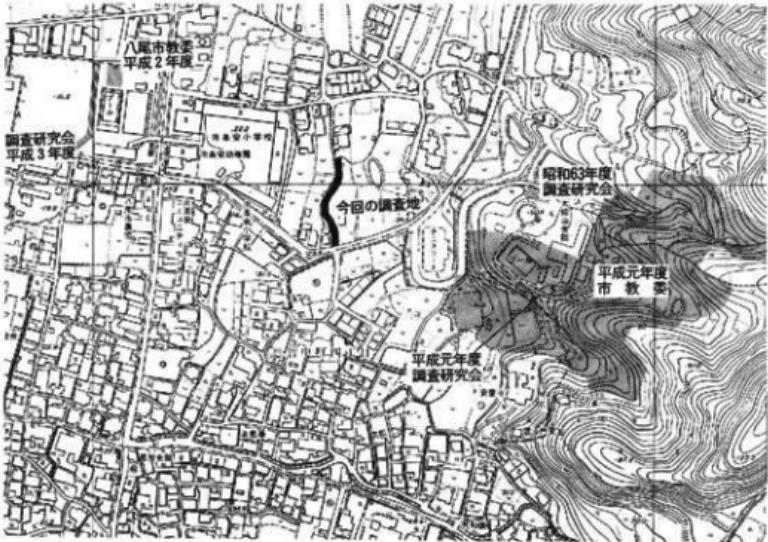
7. 備 考

今回の調査は $2\text{m} \times 2\text{m}$ の入孔部分の素掘りの調査のため、深くまで掘り下げるることはできなかったが、第1・2調査区では多くの知見をえることができた。第1調査区では焼土坑を2基検出し、また甕を埋めたピットが検出出来たことから住居跡の存在を推定できるものであり、また、第2調査区の溝を構築していた造構面は細砂層を切り込むかたちで遺存していることがわかった。旧大和川の堆積層あるいは支流の一部と思われるが、付近での調査では今後注意する必要がある。

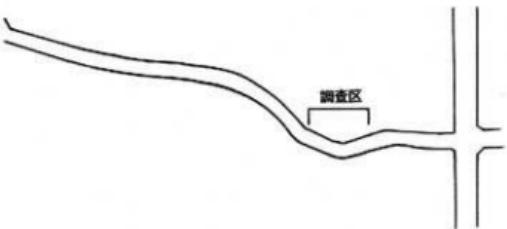
(道)

4. 恩智遺跡（91-540）の調査

1. 調査地 恩智北町4丁目
2. 調査期間 平成3年1月22・23日
3. 調査契機 市道拡幅工事
4. 調査経過 調査時には工事区間の北側はすでに擁壁工事を終了していた。施工予定地の南端から40mの部分、道路が西へ張り出す変換部分（本文ではこれを基点と呼称する。）から南側では幅約2mにわたって削平されており、高さ2mの崖面状をなす状態であった。この断面を観察したところ、基点から1.5m前後のところで埴輪片、須恵器片の露出がみられた。そこで、八尾市道路課と協議を行い、崖面となり断面の露出している、長さ約20mの部分について、精査を行い、図面の作成、遺物の採集を行なうこととなった。
5. 基本層序 この結果、当調査地における基本層序についておおまかに把握することができた。まず、地山とみられる灰青褐色砂質土は南側にいくに従い



第15図 調査地周辺図 (1/5000)



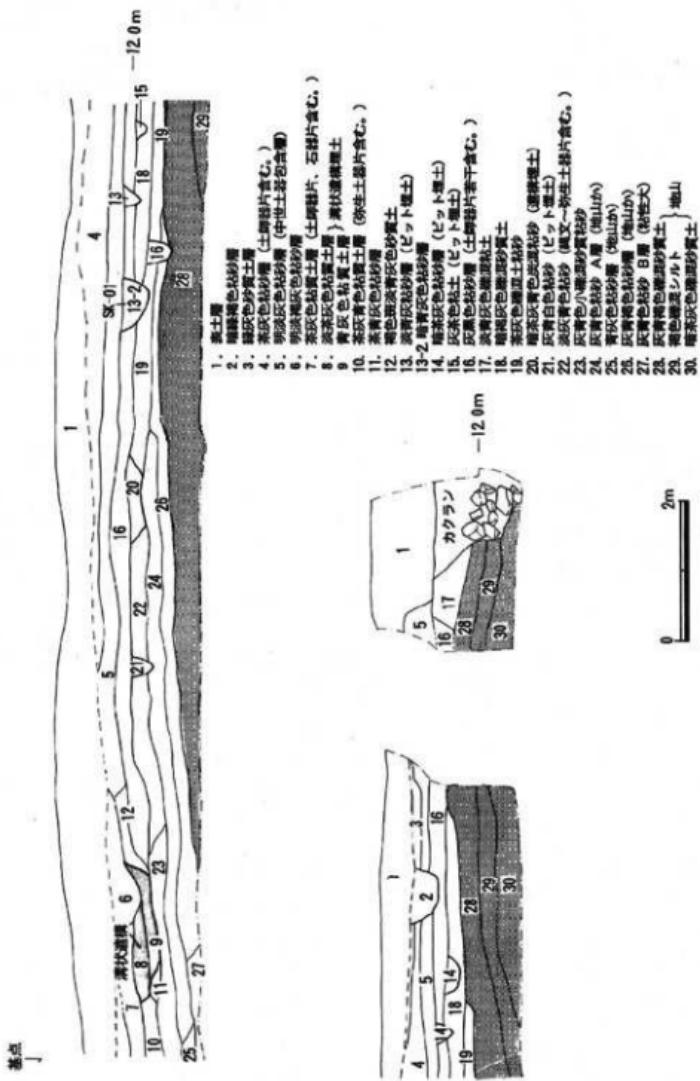
第16図 調査区設定図 (1/1500)

高くなり、基点から12m以南のところではこの下で褐色疊混シルト、暗茶灰色疊混砂質土を確認した。この上には灰青色粘砂層、灰青褐色粘砂層が堆積する。ここでは全く遺物を確認しておらず、地山となる可能性をもつ。弥生土器等を含む淡灰青色粘砂層が堆積しており、上面にはビット、土壙などのきりこみがみられた。このうち、SK01には弥生土器小片が含まれていた。この上では瓦器片等を含み、中世の包含層と思われ明淡灰色粘砂層等を確認した。この上は表土の堆積となる。

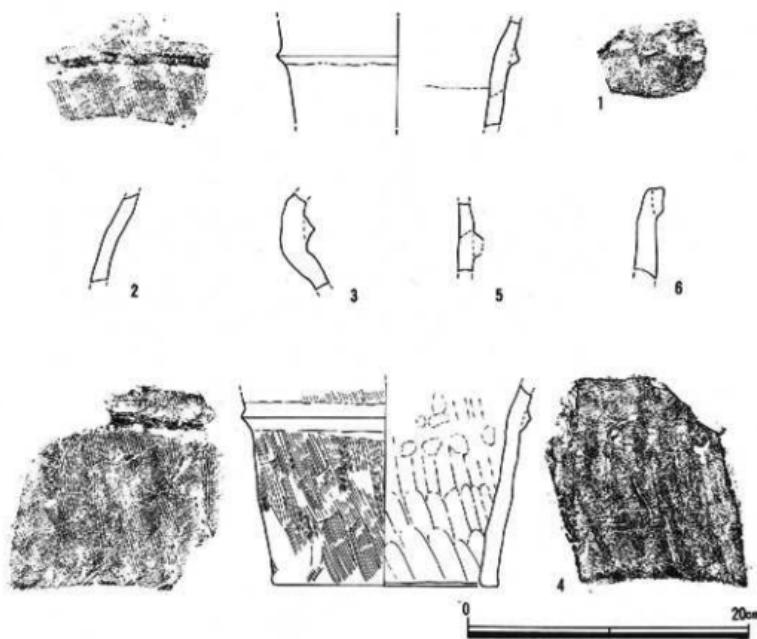
6. 遺構、遺物

埴輪片を確認したのは基点より南へ約0.8mの地点で幅2.0m、深さ0.3mの溝状遺構である。これは、茶灰青色粘質土層をベースにしてきりこんでおり、さらにこのベース層を中心包含層にきりこんでいる。この掘りこみは古墳の周濠等になる可能性もあるが、判然としない。

第18図の1～5は溝は溝状遺構から、6は、カクラン層から出土した埴輪片である。1は最大径17.4cmをはかり、断面三角形のタガをもつ。外面はタテハケ、内面はユビナデ、ユビオサエを行なう。4は底部で底径は16.2cm、残存高は13.9cmをはかる。断面三角形のタガをもち、外面はタテハケ、内面は底面方向へ向かうユビナデを行なう。タガ位置の内面は接合痕はないが、ユビオサエを行なう。2は筒部破片で外面はタテハケを行なう。3は朝顔形円筒埴輪の頭部になると思われ、タガの断面は三角形である。5はタガ付近の破片。全体に摩滅が著しい。6は円筒埴輪の口縁部になるかと思われる。断面台形のタガを貼りつける。焼成



第17図 調査区土層断面図 (1/40)



第18図 出土遺物実測図 (1/4)

は2～5は軟質、1及び6はやや硬質である。胎土は全体に粗い。

これらは川西編年のV期でも新しい段階に位置付けられ、6世紀中葉頃の所産になろう。

7. 備 考

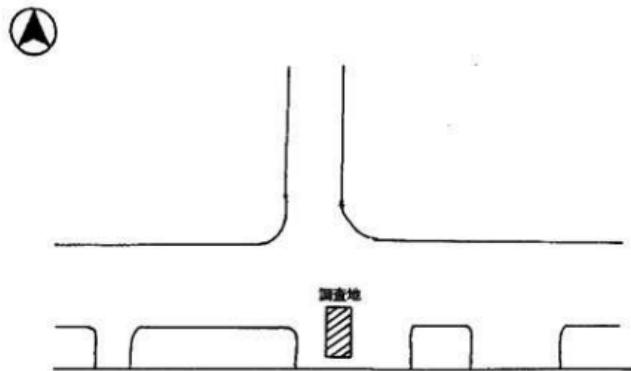
今回出土した埴輪はこの付近に後期古墳の存在したことを示すものであるが、調査地の東側の現地形に古墳状の隆起は残っていない。ただ今回拡幅される市道がちょうど埴輪を出土した地点付近から西へ迂回するよう張りだしていることは注意される。この市道の張りだしもまた、この付近にかつて古墳のあったことを示すものかもしれない。（吉田）

5. 成法寺遺跡 (92-561) の調査

1. 調査地 高美町1丁目
2. 調査期間 平成4年2月24日
3. 調査契機 公共下水道工事（発進立坑設置）
4. 調査方法 発進立坑部分（東西2.8m、南北5.8m）を対象に地表下1.8mまで重機と人力を併用し掘削した。さらに下層確認のため、地表下3mまで重機掘削を行った。
5. 基本層序 地表下1.6m、TP + 7.2m灰茶色炭混粘砂層上面およびこの下の灰色シルト層上面で古墳時代の遺構面を確認した。
調査区の南側では古墳時代の遺構面のベースとなる灰色シルト層は茶褐色斑灰色シルト層に対応する。この下は約0.3mの褐色粘砂層をはさんで地表下3.0m、TP + 5.8mまで黄灰色粘土層、灰黄色粘土層が堆積し、この下は黄灰色粗砂層の堆積となる。
6. 検出遺構、遺物 [灰茶色炭混粘砂層上面] SK01-調査区の北西隅で遺構の一部を検出



第19図 調査地周辺図 (1/5000)

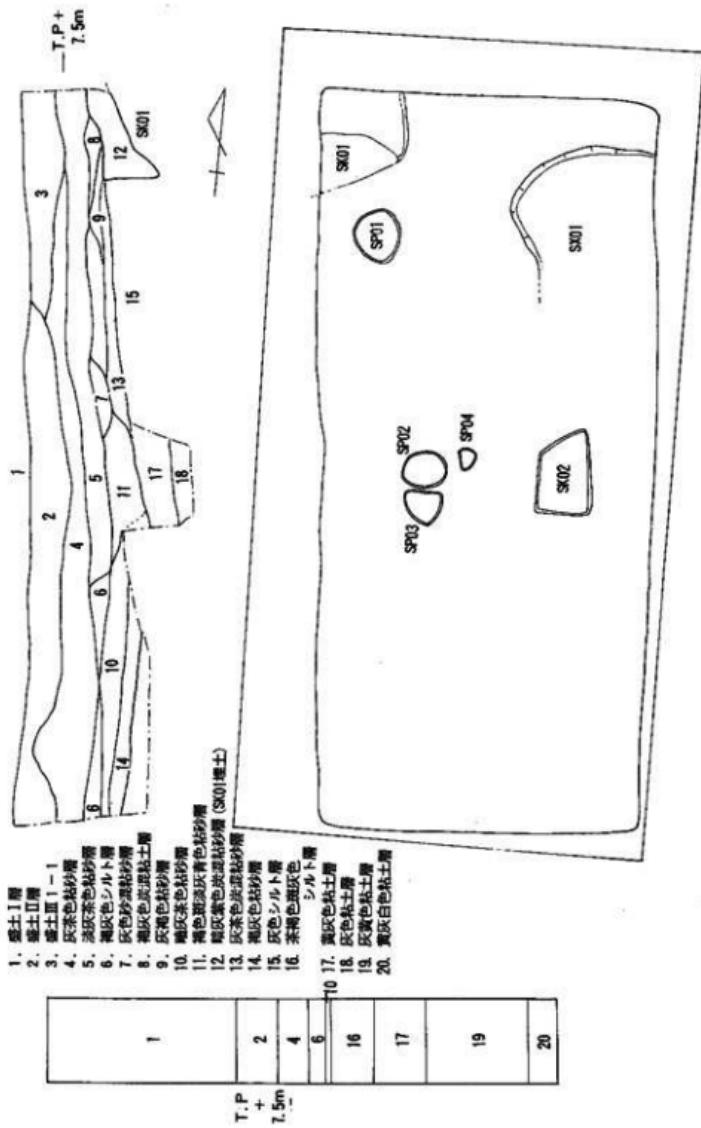


第20図 調査区設定図

したため形状不明。深さは最深部で0.38m。底面は段をなして、南側へおちこみ、直に立ち上がっている。埋土は暗灰紫色炭混粘砂層。土師器壺片等が出土。S P01 — 平面、円形。最大径 0.4m。深さは最深部で0.34m。埋土は灰色粘砂層。土師器片出土。S X01 — 東南部の輪郭が判然とせず、形状不明。深さは最深部で0.09m。埋土は灰色粘砂層。土師器片が出土。

(灰色シルト層上面) S K02 — 平面、隅丸台形。南北最大長 0.6m、東西最大幅0.38m。深さは最深部で0.05m。炭を多く含む。埋土は灰色粘砂層。土師器壺片等が出土。S P02 — 平面、だ円形。最大径 0.3m、深さは最深部で0.09m。埋土は灰色炭混粘砂層。土師器片が出土。S P03 — 平面、隅丸三角形。最大径0.26m、深さは最深部で0.06m。埋土は灰色炭混粘砂層。土師器片が出土。S P04 — 平面、隅丸三角形。最大径0.16m、深さは最深部で0.08m。埋土は土師器片が出土。

7. 備 考
当調査地に隣接して大阪府教育委員会により、府道拡幅に伴う調査が行われており、(大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要V』1990他)弥生時代から古墳時代にかけての集落跡等が検出されている。今回の調査成果も、これと密つながりをもつものであろう。



第21図 調査地平・断面図 (1/40)

6. 東弓削遺跡（91-373）の調査

1. 調査地

八尾木東1丁目地内

2. 調査期間

平成4年3月4・19日

3. 調査契機

公共下水道工事（第19工区）

4. 調査方法

第1地点では発達した立孔部分を対象にしたが、ガス、水道、NTTなどの既設の埋設物の為に1m×2mの幅でしか調査できなかった。第2地点は第1地点から東に伸びる開削部分（幅1.5m）で、約4mの長さを対象とした。第1地点は1.1mまでを機械で掘削し、以下2.7mまでを人力を併用して掘削した。第2地点は既に地表下2.2mまで掘削されていたので、以下0.45mを人力のみで掘削した。

5. 基本層序

地表下1.1mまでは盛土されている。③暗淡灰色粘土は中世の耕作土とみられ、第2地点では畦畔状の高まりが確認できた。地表下1.5~1.6mから0.4~0.55mの厚さで堆積している④暗灰色砂混粘土Ⅰ、⑤暗灰色砂混粘土Ⅱは古墳時代前期の遺物包含層となる。庄内甕、布留系甕、



第22図 調査地周辺図 (1/5000)



第23図 調査地点位置図 (1/600)

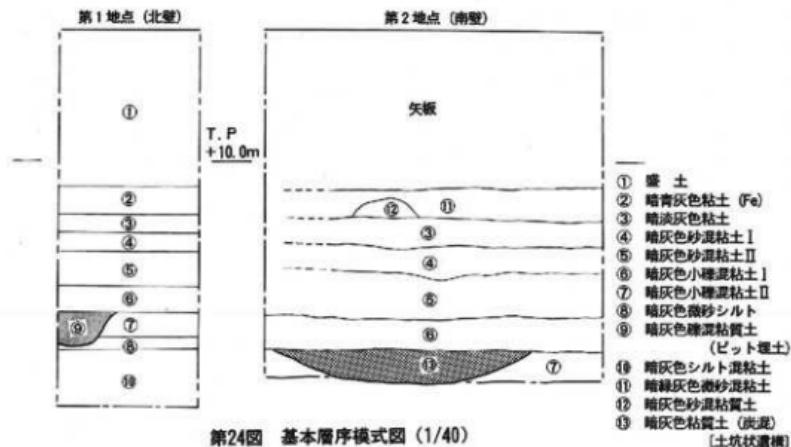
V様式甕、円形浮文を有する壺片、器台、土師器等が出土している。しかし、⑤上面、⑥上面のいずれも遺構を検出することはできなかった。⑥暗灰色小礫混粘土Ⅰは炭化物を含んでいる。庄内甕、V様式甕、布留系甕、器台が出土しており、古墳時代前期の遺物包含層となる。そして地表下2.1m～2.25mの⑦暗灰色小礫混粘土Ⅱ上面が遺構面になり、ピット、土坑状遺構を検出している。また、⑦層とその下部⑧暗灰色シルト混粘土でも庄内甕、吉備系甕、壺、高杯、器台等が出土している。

このように遺構面は一面のみ検出しただけであったが、古墳時代前期の遺物包含層は幾層にも重なっているのが確認でき、短い時間に地層が堆積していたことがわかる。

6. 遺構・遺物

〔ピット〕

第1地点、地表下2.1m(TP + 8.9m)で検出。北壁近くで検出したため全容は不明である。径約0.35m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰色蝶混粘土。(1)の庄内甕、(2)の壺の頭部などが出土している。(1)は口径13.6cm、残存器高13cm、口縁端部はつまみ挙げられ、体部最大径は中位に位置する。外面は上半に細かいタタキを施し、下半はハケナデを行なうタタキを消している。米田氏編年のⅢ期に比定できる。(2)は口頭部は体部からやや直立気味に立ち上がった後外湾する。外面はヘラミガキを



第24図 基本層序模式図 (1/40)

行い、口頭部はタタキを施した後、イタナデで消している。内面は頭部付近に指頭痕が残る。灰白色を呈する。

〔土坑状遺構〕

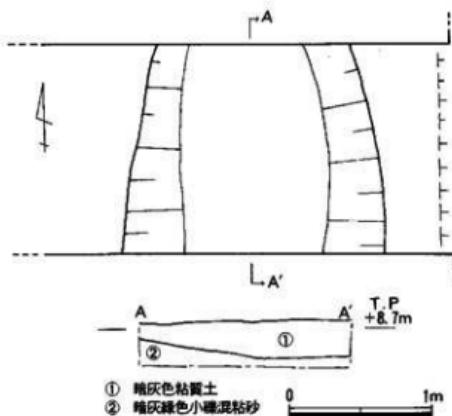
第2地点、地表下2.25m (TP +8.75m) で検出。その大半が調査区外へ拡がるため全容は不明であるが、現状では南北に主軸をもつやや横円形を呈する土坑と推定される。深さ0.27m、検出径は南北1.5m、東西1.9mを測る。埋土は暗灰色粘質土。(11～13)の壺の口頭部の他に、多くの庄内甕、布留系甕の破片、ミニチュアの高杯、製塙土器片などが出土している。(11)は口頭部は「く」の字に丸みをもって屈曲し、外反する。端部はわずかに平坦になる。(12)は「く」の字に屈曲して、口縁端部はつまみ上げられる。外面はタタキ、内面はヘラケズリを施す。(13)も「く」の字に外反する口縁を有し、端部はつまみ上げられ、尖り気味に終わる。外面にタタキを施す。

〔暗灰色小礫混粘土I出土遺物(6)〕

(6)は壺の胴部で外面下位はタタキを施した後イタナデを行い、上位はハケナデを行う。内面中位以下は指頭痕が明瞭に残っており、頭部付近はハケナデを施す。

〔暗灰色小礫混粘土II出土遺物(3～5, 9)〕

遺構面のベースとなる層であるが、今回は最も多くの遺物が出土して



第25図 土坑状遺構、平・断面図 (1/40)

いる。(3)は小型の鼓型器台で受部と脚部の間は貫通しており、外面にヘラミガキを施す。(4)も器台の脚部で内外面ともにハケメ調整を行う。(5)は吉備系甕の口縁部で、直立した口縁部を有し、端部はややつまみ上げて終わる。外面に7条の凹線を持ち、頸部内面はヘラケズリを行う。詳(註2)細な時期は不明であるが、高橋氏編年X-c～X-eに比定できる。(9)は直口壺で上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸び口縁部に至る。端部は外傾する面をもつ。外面は7本／単位の凹線の深いハケメを施す。内面は体部はハケメを施し、頸部付近はナデ、指頭痕を残す。口縁はハケ調整を行う。

(暗灰色シルト混粘土出土遺物 (7・8・10))

(7)は中空の小型器台の脚部で3孔を穿つ。外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を行う。(8)は庄内甕で外面は右上がりのタタキを施し、内面は頸部までヘラケズリを行う。口径19.4cm。(10)は高杯の杯部で外面に縦方向のヘラミガキ、内面に横方向のヘラミガキを施す。

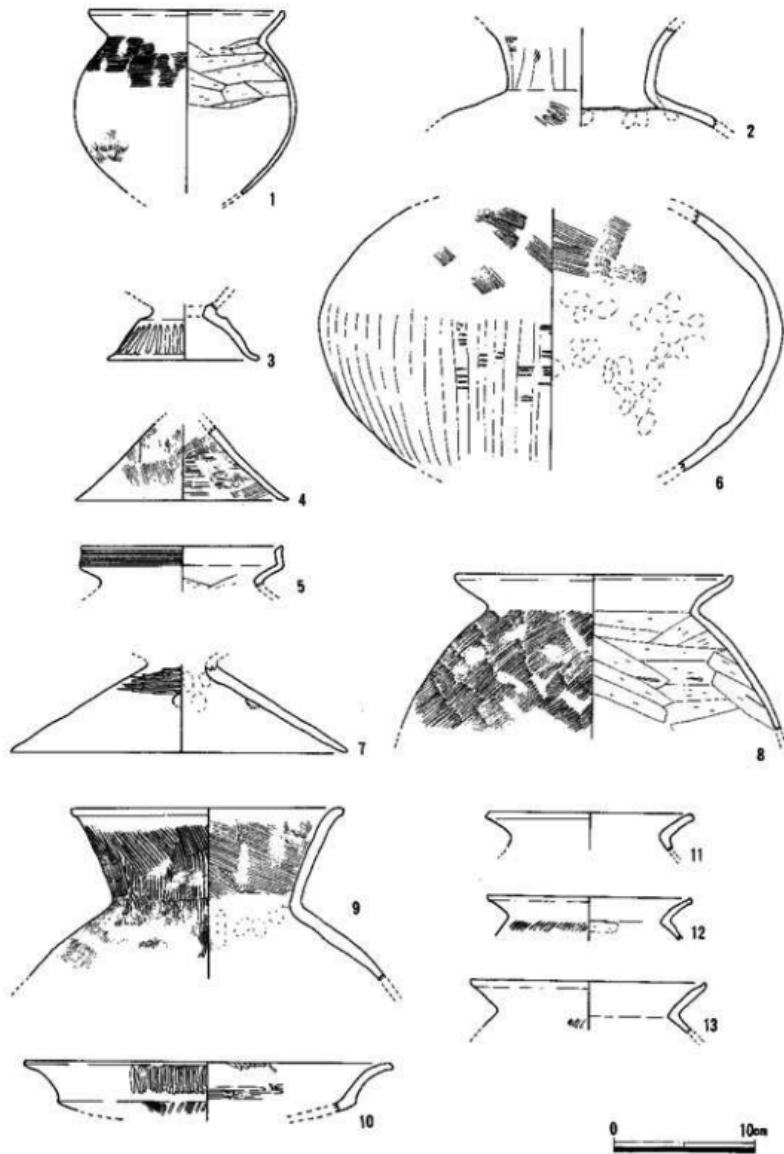
7. 備 考

本調査は僅かな面積でしか行えなかったが、古墳時代初頭の遺構面を確認することができた。また東30mの地点の立孔部分の立会調査では砂層の堆積を確認しており、自然河川があったことが推定できる。(道)

8. 参考文献

(註1) 米田敏幸『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会1984

(註2) 高橋謙「岡山県南部地方の土器編年と庄内式」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会1988

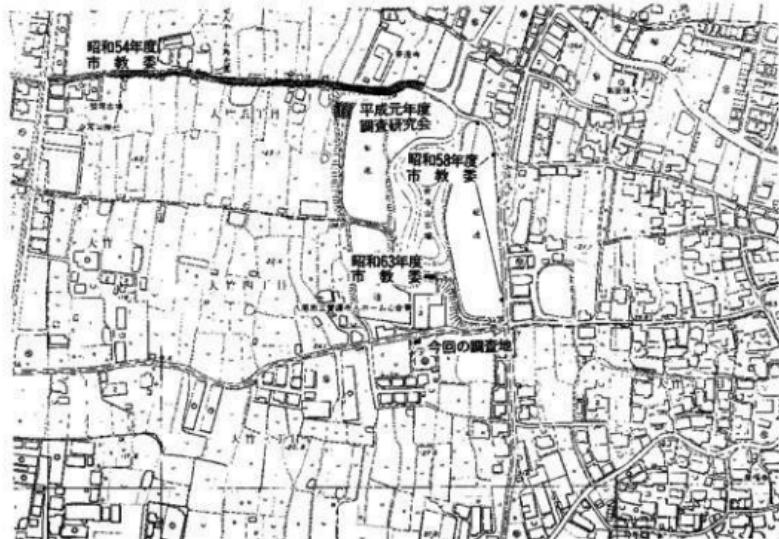


第26図 出土遺物実測図 (1/4)

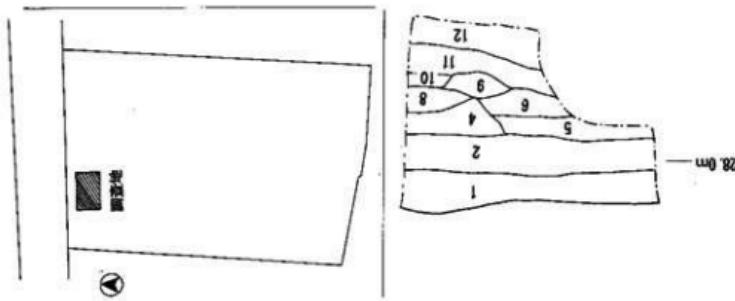
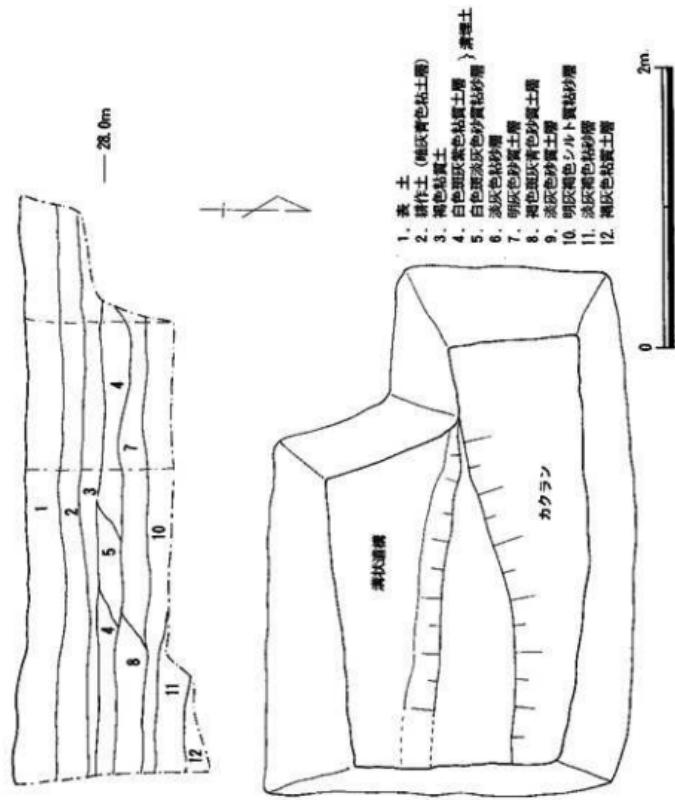
7. 大田川遺跡（92-226）の調査

1. 調査地 大竹3丁目5番地
2. 調査期間 平成4年7月14日
3. 調査契機 集会用倉庫建設
4. 調査方法 敷地内の北西隅にあたる施工予定地内に東西4m、南北2.5mの調査区を設定し、地表下1.0mまで重機と人力を併用し掘削した。
5. 基本層序 調査区の北側は排水管埋設時の擾乱層であったが、北側では旧土層が遺存していた。地表下0.6m～0.7mで埴輪小片を含む灰紫色炭混粘砂層等を確認した。この下には明灰色砂質土層をはさんで、明灰褐色シリカ質粘砂層等が堆積するが、遺物は土器の細小片を確認するに留まった。埴輪片を含む土層はブロック状に土層が分かれている。また、この下に堆積する明灰色砂質土層から切り込む褐色斑灰青色砂質土層は耕作土と酷似しており、埴輪を含む層は近現代の整地層である可能性をもつが、確証となる遺物の出土もなく判然としない。

6. 検出遺物他 白色斑淡灰色砂質粘砂層、白色斑灰紫色粘土から炭片などと混じって、



第27図 調査地周辺図 (1/5000)



第28図 調査区設定図 (1/600)

第29図 調査地平・断面図 (1/40)

埴輪小片が出土した。

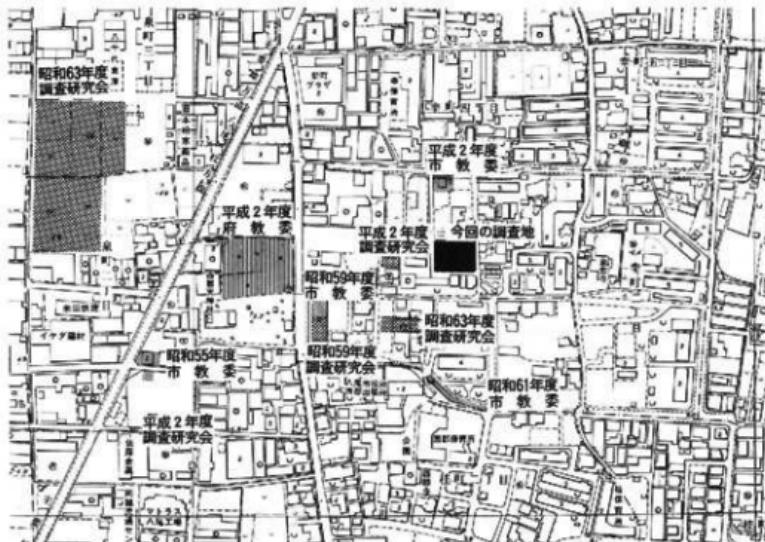
7. 備 考

当調査地は心合寺山古墳の推定前方部南側周濠位置にあたる。現在、古墳の東側に周濠の名残りを留めるかのように位置する、大竹緑池の南西堤上端からは、約6m下がった地点となる（八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要6』1992年）。また、推定前方部南端からは約50m離れた地点にあたる。今回出土した埴輪小片が心合寺山古墳に伴うものか、別の古墳に伴うものかは判然としない。今後の調査に課題を残す。

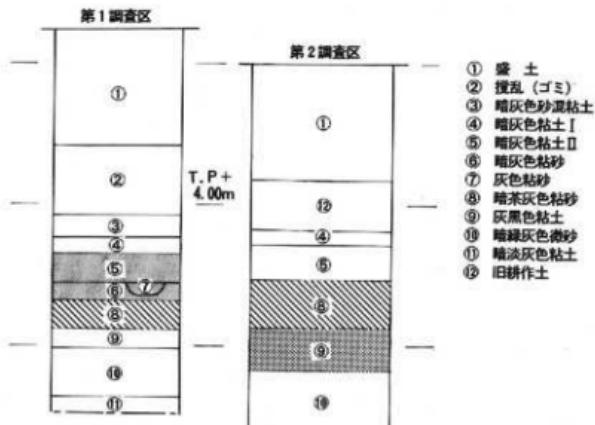
（吉田）

8. 萱振遺跡（92-359）の調査

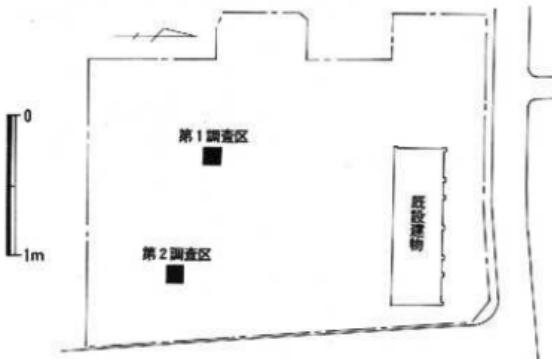
1. 調査地 幸町3丁目80、83
2. 調査期間 平成4年10月20日
3. 調査契機 西部地区改良住宅建設
4. 調査方法 住宅建設用地の西側に2.5m×2.5mの第1調査区を、東側に3m×3mの第2調査区の2ヶ所を設定し、地表下1.5mまでは機械のみで、以下地表下2.6m前後までは機械と人力を併用して掘削を行った。
5. 基本層序 第1調査区 地表下1.6m前後（TP +3.65m）からみられる⑤暗灰色粘土Ⅱとその下部層である⑥暗灰色粘砂で土師皿、瓦器焼の破片や布目痕の残る平瓦が出土しており、中世の包含層とみられる。層厚は⑤と⑥を併せて0.34mである。また、地表下1.96m前後（TP +3.31m）の⑧暗茶灰色粘砂が弥生時代末期から古墳時代初頭の遺物包含層になる。
第2調査区 ここでは第1調査区でみられた中世の遺物包含層は確認できず、弥生時代末期から古墳時代初頭の遺物包含層である⑧暗茶灰色粘



第30図 調査地周辺図 (1/5000)



第31図 基本層序模式図 (1/40)



第32図 調査区設定図 (1/1000)

砂が地表下1.55m前後($T.P + 3.45m$)でみられる。層厚は約0.35mで第1調査区よりも厚く堆積している。また、この下部層には弥生時代後期の遺物包含層になる⑩灰黑色粘土が地表下1.9m($T.P + 3.1m$)から約0.22mの厚さで堆積している。⑪は第1調査区でも確認しているが層厚も0.13mと薄く、遺物も出土していない。しかし、平成2年度に当教育委員会が行った西約25m付近での調査では弥生時代後期の土器がまとめて出土している。

(潜)

8. 参考文献

八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告Ⅱ』1990

9. 跡部遺跡（92-331）の調査

1. 調査地

東太子町1丁目106

2. 調査期間

平成4年10月22日

3. 調査契機

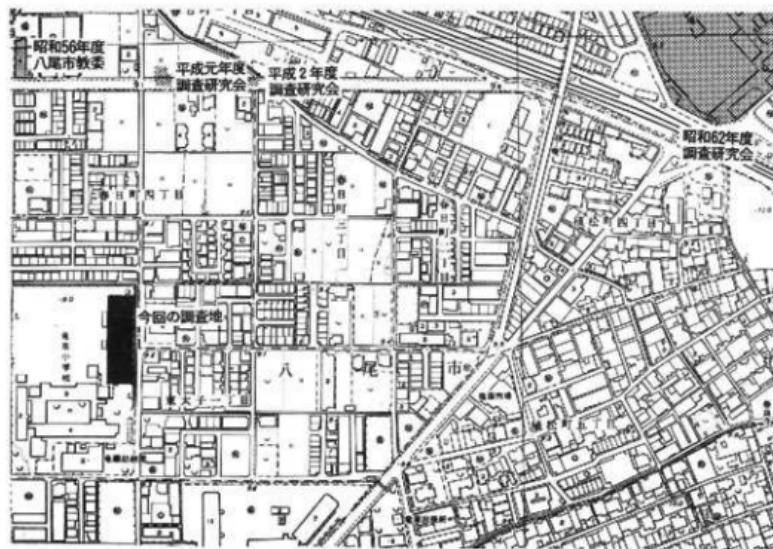
龍華小学校屋内運動場及びプール改築

4. 調査方法

屋内運動場及びプールは調査時点では現存していたため、屋内運動場に関しては建物東側に $1\text{m} \times 1.7\text{m}$ でしか調査区を設定できなかった。またプールに関してはプールの東側に $3\text{m} \times 2.2\text{m}$ で調査区を設定した。なお前者を第1調査区、後者を第2調査区とした。いずれも地表下 2.7m 前後まで掘削を行ったが、第1調査区では幅が 1m と狭く地表下 2m 前後の⑦暗灰色シルトから水が湧いたためその大半を機械で、第2調査区では地表下 1.35m 以下を人力と機械を併用して掘削を行った。

5. 基本層序

第1調査区 — 地表下 1.5m ($\text{TP} + 8.63\text{m}$) までは盛土、旧耕作土、床土があり、以下地表下 2m まで黄灰色粘砂～粘土が堆積している。上述のように⑦層が湧水層であるため、⑧層、⑨層を機械で掘削したが、



第33図 調査地周辺図 (1/5000)

いずれの層でも遺構・遺物等を確認することはできなかった。

第2調査区—第1調査区よりもおよそ1m現地盤が低くなっている。

しかし、旧耕作土、床土のいずれも第1調査区よりも0.7~0.8m低い位置で見られることから元々テラス状に高くなっていたと思われる。遺物包含層は地表1.7m前後(TP+7.45m)の④暗灰色粘土とその下部の⑤暗灰色粘土、⑥暗灰色粘性シルトである。層厚は約0.65mである。

6. 遺憾・遺物

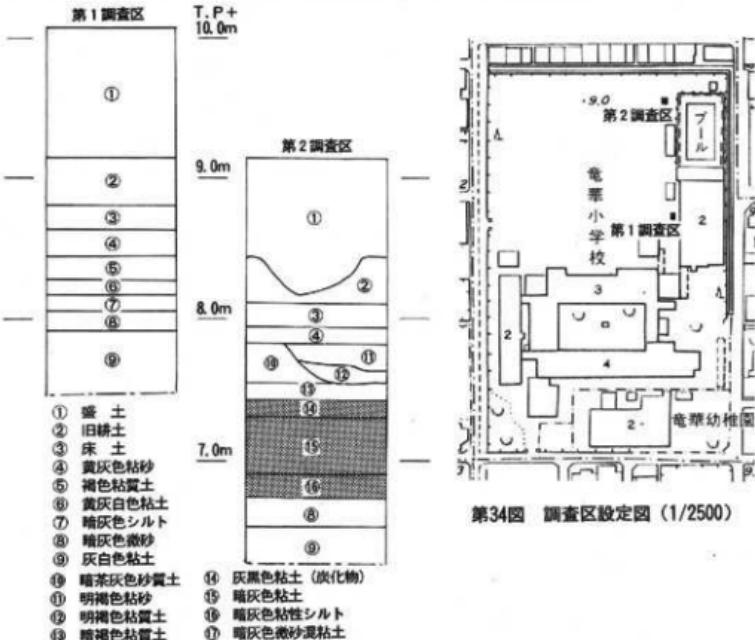
遺物は破片が多く、時期は明確にしうることはできないが布留式期に相当すると思われる。また、地表下 2.2m付近では木杭を 2 本確認することができた。

7. 備 考

本調査地の南西に接する道路部分で跡八尾市文化財調査研究会が平成2年度に実施した調査でも古墳時代前期の良好な遺構・遺物を検出している。(済)

8. 参考文献

鶴八尾市文化財調査研究会「平成2年度事業報告」1990



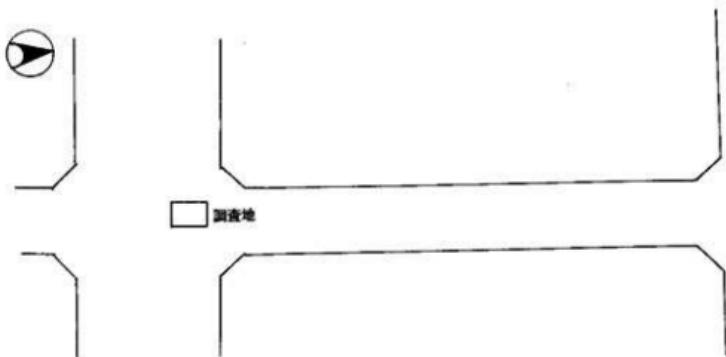
第35回 基本層序模式圖 (1/40)

10. 中田遺跡（92-312）の調査

1. 調査地 中田1丁目
2. 調査期間 平成4年11月24日～26日
3. 調査契機 公共下水道工事（発進立坑設置）
4. 調査方法 発進立坑部分（東西4.4m、南北2.5m）を対象に地表下1.8mまで重機と人力を併用し掘削した。さらに下層確認のため、地表下3.2mまで重機掘削を行った。
5. 基本層序 調査着手当初、既に地表下1.3mまで重機掘削がなされていたため、これより上の土層の堆積状況は残念ながらわからない。当調査では三つの遺構面を検出した。第1遺構面は地表下1.55m前後、TP+8.4m前後の褐色斑淡暗灰色粘砂層上面で13世紀代の遺構の検出面である。第2遺構面はこの下のTP+8.3m前後の褐色斑灰色粘土層上面でこの上で瓦器碗が2枚重ねて伏せた状態で出土したため、遺構面として認識した。さらにこの下の淡青灰色シルト層上面で遺構面を確認した。



第36図 調査地周辺図 (1/5000)



第37図 調査区設定図 (1/800)

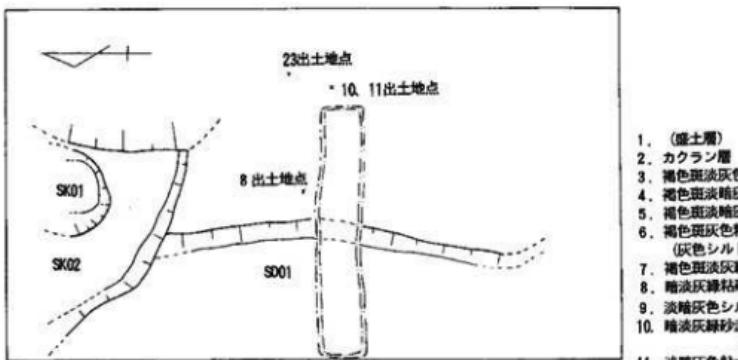
この下ではTP + 7.6m前後に黄灰白色粗砂層が堆積し、この直上で古墳時代前期と思われる土器片を含む暗灰色粗砂混粘砂層を確認した。

6. 検出遺構他

〔第1遺構面〕 SD01—南北方向の溝で東肩を検出。最大検出長2.8m。深さは最深部で0.15m。埋土は灰褐色粘性砂質土層。瓦器片、土師器片、瓦片が出土。SK01—調査区北側で南半分のみ検出。平面はだ円形になると思われる。最大径0.58m。深さは最深部で0.18m。埋土は黄灰白色シルトブロック混灰茶色粘土層。瓦器片、土師器片が出土。SK02—SK01によりきられる。南肩のみ検出し全形不明。深さは最深部で0.2m。埋土は黄灰白色シルトブロック混灰色粘土層。瓦器片、土師器片が出土。

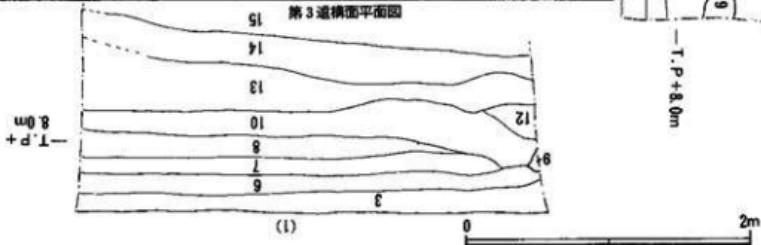
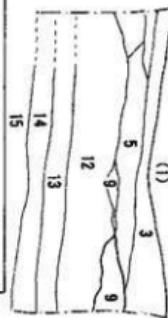
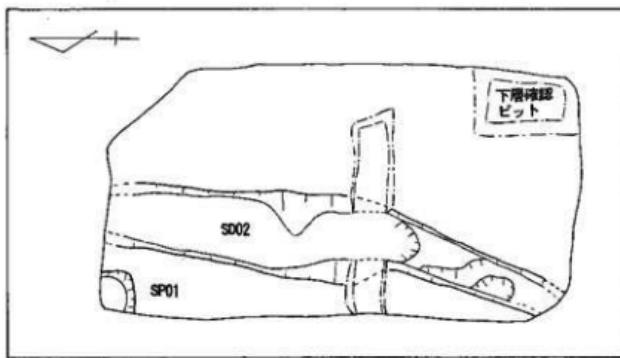
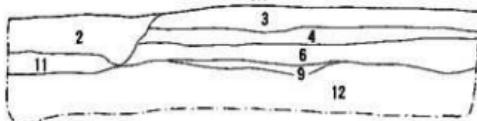
〔第2遺構面〕調査区東端で瓦器碗が2枚重ねて伏せた状態で出土したのは、前述したとおりである。また、これのすぐ北側の第1遺構面のベースである褐色斑淡暗灰色粘砂層から金銅製の帶金具の一部と思われる遺物が出土した。これは当層掘削時に出土したため、原位置を確認できなかった。したがって第2遺構面直上から出土した可能性をもつ。

〔第3遺構面〕SD02—当初、淡青灰色シルト層上面で木質などの有機物を多く含む淡暗灰色シルト粘土層が南北方向の帯状に堆積するのが、みられた。この帯状堆積をSD02としたが、これは幅・深さともに不規則で、底面も細かな凹凸がある。さらに下層確認時にSD02の西側のベースは東側とやや異なることを確認した。このことから幅が西へさらにひろがる溝が当初あり、この溝の東肩部分を中心に堆積する有機物を確

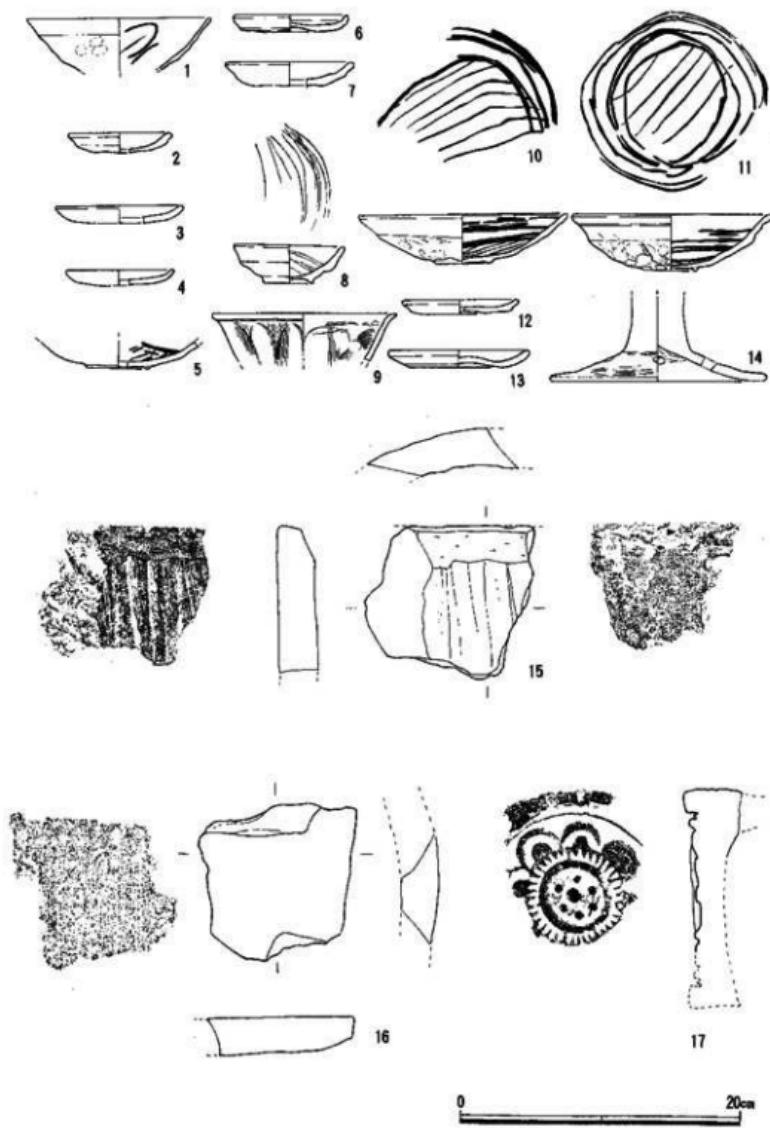


1. (盛土層)
2. カクラン層
3. 褐色斑淡灰色シルト質粘砂層
4. 褐色斑淡灰色粘砂層
5. 褐色斑淡灰色泥粘土層
6. 褐色斑灰色粘土層
(灰色シルトブロック層)
7. 褐色斑淡灰粘土層
8. 雜淡灰粘砂層
9. 淡暗灰色シルト泥粘土層
10. 雜淡灰粘砂層粘土層
(SD02埋土?)

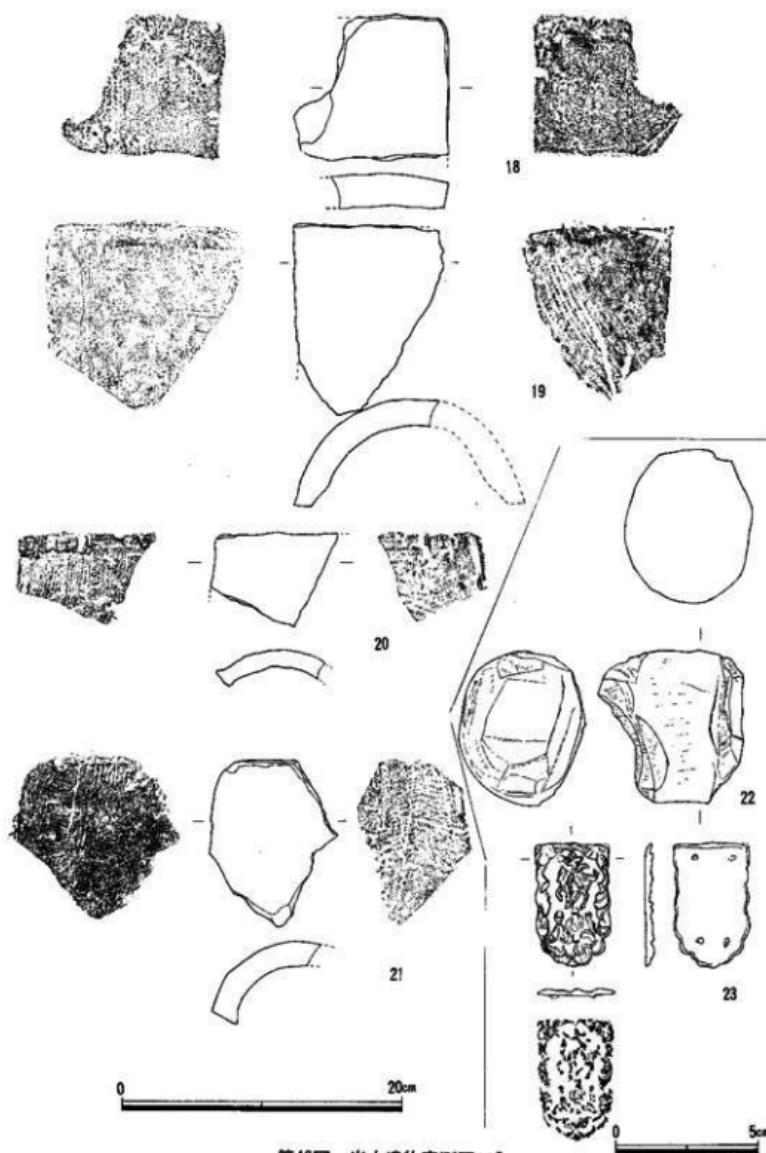
(1)



第38図 調査区平・断面図 (1/40)



第39図 出土遺物実測図-1 (1/4)



第40図 出土遺物実測図-2

認した可能性も考えられる。S P01 — 調査区北西端で検出、全形不明。
深さ0.06m。土師器小片出土。

7. 出土遺物

15、16は第1遺構面のS D01から出土した平瓦である。1は第1遺構面精査時に出土した瓦器碗である。23が前述の金銅製帶金具の一部かと思われる遺物である。全体に灰茶緑色を呈するが、一部金色に輝く部分がある。全長4.4cm、上端幅2.25cmを計る。表面には文様区内に馬上の武人らしき人物を彫りだす。下半は仏像のようにもみえるが、判然としない。裏面には4か所の突起がある。付近の出土遺物に2の土師皿及び18の平瓦、20の丸瓦がある。10、11の瓦器碗が2枚重ねで出土したものである。11の上に10を重ねた状態で出土した。口縁に向かって外上方に開く浅い器形で、断面三角形の高台をもち、外面の暗文は略される。13世紀後半に位置付けられる。3、4の土師皿、5の瓦器碗及び9の同安窯系青磁碗は第2遺構面のベースである褐色斑灰色粘土から出土した。さらにこの層のもっとも下位、第3遺構面の直上付近で出土したのが、6、7の土師皿、19の丸瓦、8の瓦器小碗である。8はほぼ完形である。S D02からは17の軒丸瓦の他に、22の用途不明木製品、12、13の土師皿が出土した。また動物の歯かと思われる遺物（図版10の24）が出土している。17はS D02の中央の東肩斜面上で瓦当面を上に向けた状態で出土した。瓦質の重弁八葉蓮華文軒丸瓦で、近接地での中田遺跡調査会調査時出土例（八尾市教育委員会『中田遺跡』1974年）と同文様である。平安末ないし鎌倉初期の所産であろう。21は第3遺構面のベースである淡青灰色シルト層から出土した丸瓦である。14は黄灰白色粗砂層直上で出土した土師器高杯脚部である。

8. 備考

今回の調査では13世紀後半頃の遺構面を2面、鎌倉初期に遡る可能性をもつ遺構面を1面検出した。S D02では瓦器を確認していないが、埋土の遺物は軒丸瓦より時期的に降るようである。したがってS D02の構築が鎌倉初期に遡るか否かは問題が残る。いずれにせよ、この付近に寺院のあったことを示す中田遺跡調査会の調査結果を補強するものになる。褐色斑淡灰色粘砂層より出土した帶金具状製品は特殊である。2枚重ねの瓦器碗となんらかの関連をもっていた可能性があり、祭祀的な意図で投棄ないし置かれたものであろう。この時期まで寺院が存在していた可能性も考えられ、今後の検討課題を残す。

（吉田）

11. 木の本遺跡（92-70）の調査

1. 調査地 南木の本4丁目地内
2. 調査期間 平成4年12月9日
3. 調査契機 道路築造
4. 調査方法 施工予定地の北、南、中央にそれぞれ4m四方の調査区を設定し、それぞれ地表下約3m付近まで重機と人力を併用して掘削した。
5. 基本層序他 調査区3ヵ所の基本層序はほとんど変わらない。地表面の高さはTP +9.8m前後、市道を経た南側では盛土のためTP +10.4m前後となる。TP +6.7m以下は暗灰色シルト層であり、この上には厚さ0.7m前後の灰色系の砂層が堆積し、この上には厚さ0.4m前後の白色斑灰色粘土層が堆積する。これは水田であった可能性のある土層であり、上面の高さはTP +7.8m～8.15mである。この上にはさらに0.2m～0.4mの粗砂層が堆積する。ここからは土師器小片が一片出土している。この上には南及び中央の調査区では灰色系の粘砂・粘土層が約0.1m～0.15mずつ



第41図 調査地周辺図 (1/5000)



第42図 調査区設定図 (1/2000)

つ、0.9m～1.0m堆積している。これもまた、土層状態の観察から水田であった可能性のある層である。このうち褐色斑灰色粘砂層、黄褐色斑砂混粘砂層からは、土師器の小片が出土している。また、北調査区ではこれに対応するTP + 8.4m～9.05m付近は粗砂層の堆積であり、水田想定層をきりこむ自然流路のあったことがわかる。

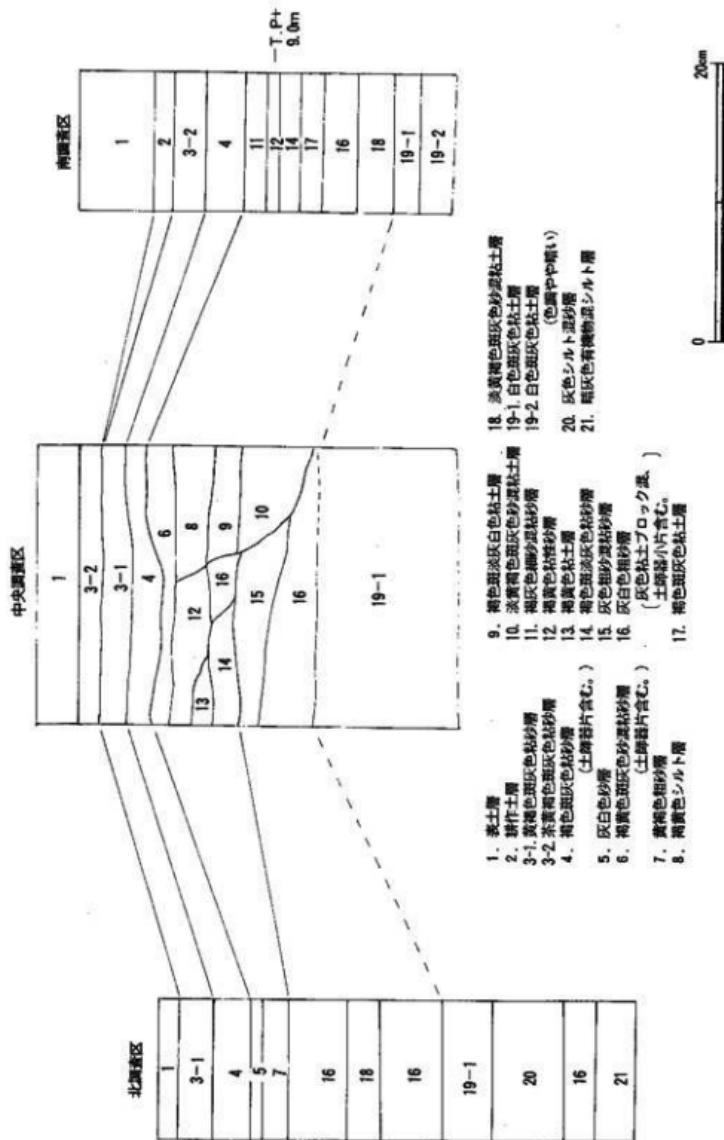
6. 備 考

当調査では出土遺物が細片であるため、各土層の時期は限定しがたい。しかしながら、付近で行なわれたこれまでの調査から、ある程度の推測は行ないえる。北調査区でTP + 7.4m付近以下で確認した灰色シルト混砂層、暗灰色有機物混シルト層等は弥生後期～庄内期の包含層となる可能性をもつ。しかしながら今回の調査では決め手となる遺物等を確認できなかった。また、各調査区で確認した水田想定層も第2大正小学校調査時に確認された古墳時代から鎌倉時代に及ぶ水田遺構となんらかの関連をもつものであろう。さらに大阪市側の長原遺跡の層序との対応関係も今後検討していく必要がある。 (吉田)

7. 参考文献

鶴八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』1989年。

鶴八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』1988年。 (吉田)



第43図 調査区土層断面略測図 (1/40)

12. 中田遺跡（92-314）の調査

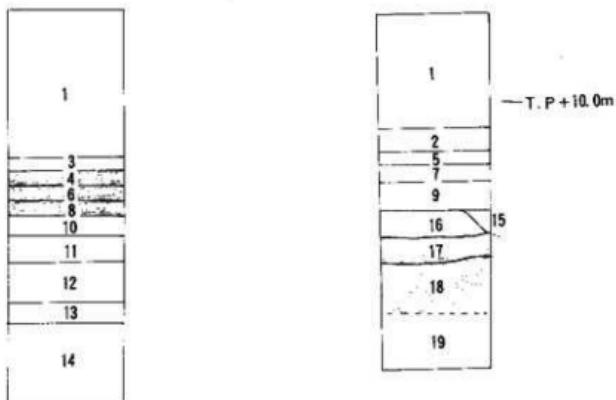
1. 調査地 八尾木北6丁目地内
2. 調査期間 平成4年12月15日、16日
3. 調査契機 公共下水道工事
4. 調査方法 №1人孔部と№2人孔部にそれぞれ2m四方の調査区を設定し、重機と人力を併用して掘削した。
5. 調査概要
〔№1人孔部〕 地表下1.16m～1.24m (TP + 9.42m～9.52m) で中世の土器片を含む褐色斑灰色粘砂層を確認した。またこの下の地表下1.24m～1.46m (TP + 9.2m～9.42m) で古墳時代中期の土器片を含む褐色粘砂層、褐色斑淡灰紫色シルト質粘砂層を確認した。さらに地表下2.8mまで掘削を行なったが遺構・遺物は確認できなかった。
〔№2人孔部〕 地表下2.5mまで掘削を行なったところ、地表下1.6m～2.12m (TP + 9.04m～8.5m) で古墳時代前期の土器片を含む褐色斑淡灰紫色シルト質粘砂層、暗灰青色粘砂層を確認した。



第44図 調査地周辺図 (1/5000)



第45図 調査区設定図 (1/1000)



- | | | |
|-----------------------|----------------------------------|---|
| 1. 黒 土 | 7. 淡褐色紫色粘質土 | 15. 深褐色灰紫色粘土 |
| 2. 細 土 | 8. 褐色斑淡灰紫色シルト質
粘沙 (古墳時代中期包含層) | 16. 灰紫色炭粘沙 |
| 3. 灰色砂と茶灰色砂の
互層 | 9. 茶褐色斑淡灰紫色砂質粘沙 | 17. 褐灰紫色シルト質 } 古墳時代
粘沙 }
18. 暗灰青色粘沙 } 前期包含層 |
| 4. 褐色斑灰色粘砂
(中世包含層) | 10. 淡灰綠色シルト | 19. 暗灰色粘土 |
| 5. 深褐色斑淡灰紫色粘質土 | 11. 淡綠灰色シルト | |
| 6. 褐灰色粘砂 | 12. 灰白色砂質シルト | |
| (古墳中期包含層) | 13. 錫灰色粘土 | |
| | 14. 灰綠色粘質土 | |

第46図 基本層序模式図 (1/40)

6. 備考 当調査地の西側の楠根川沿岸においても当調査地のそれと対応する遺構面が確認されている。

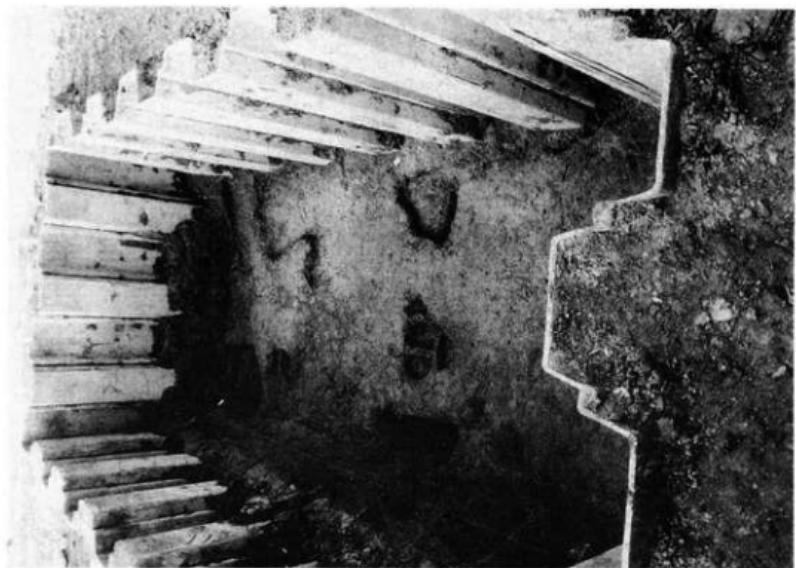
(吉田)

図版

図版 1 中田遺跡（91—353）・成法寺遺跡（91—561）



SD-2 瓦器碗出土状況



調査区全景（南より）

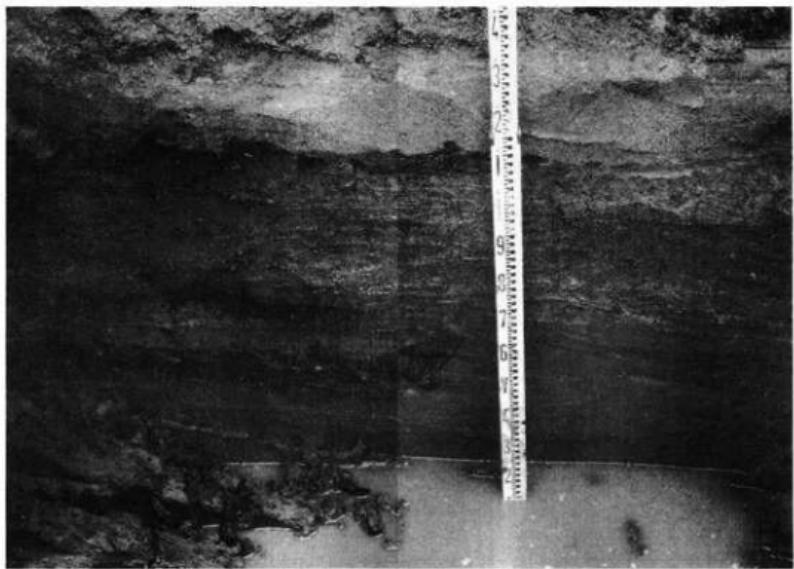


第1調査区全景（南より）





S F - 2



第 1 調査区東壁



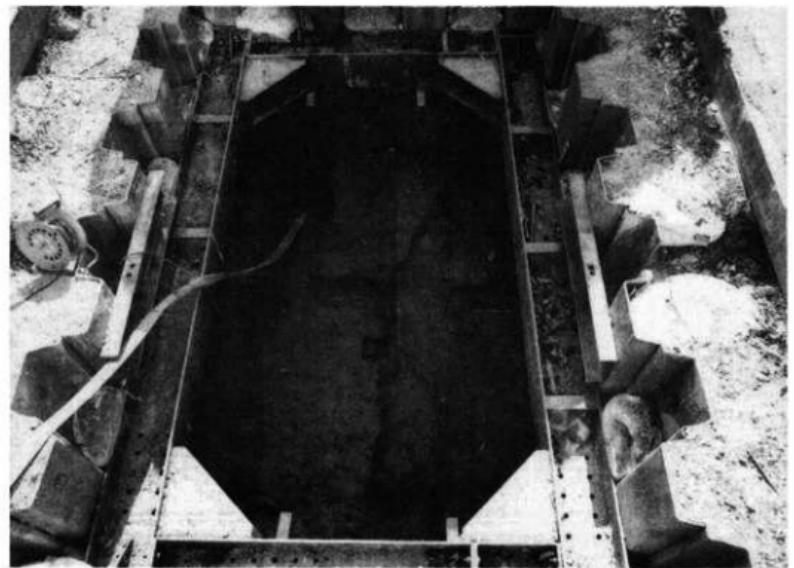
ピット



土坑状遺構



第1造構面全景（北より）



第2造構面全景（北より）

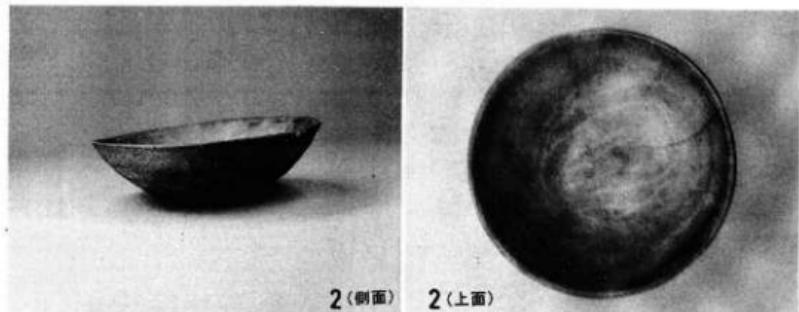


瓦器残出土状況

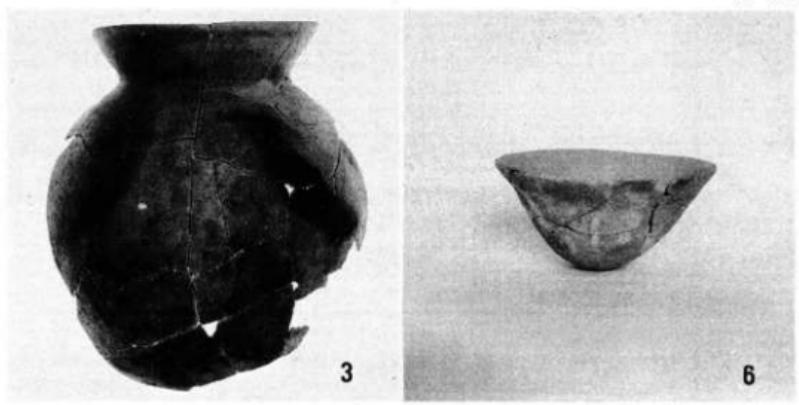


軒丸瓦出土状況

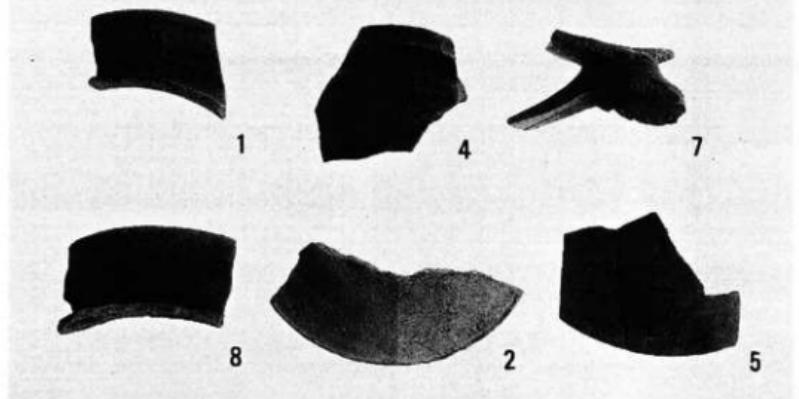
図版7 中田遺跡(91-353)・中田遺跡(91-503)



91-353

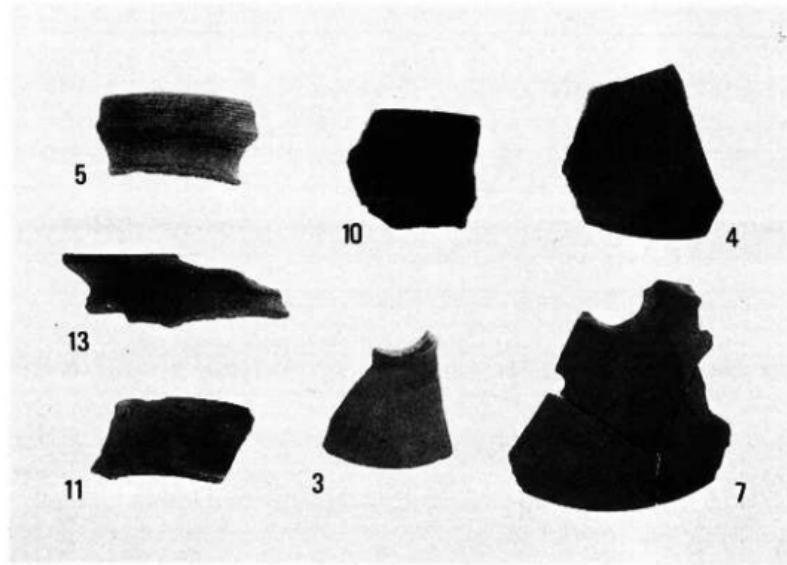
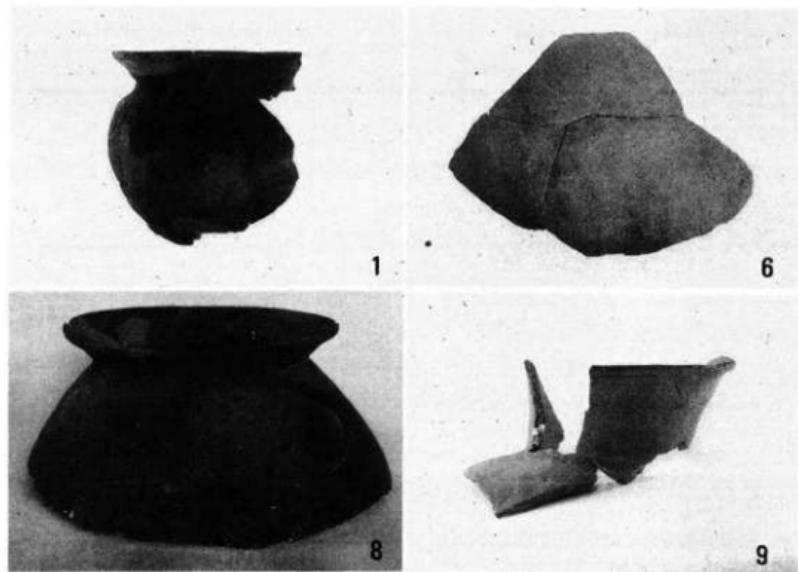


91-503



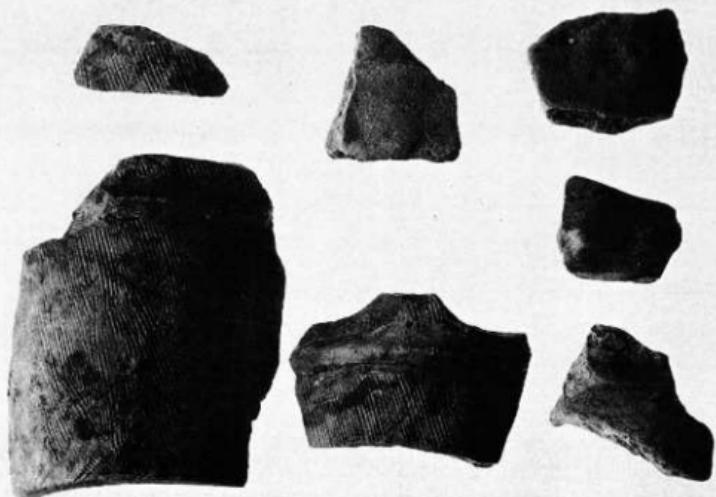
91-503

圖版 8 東弓削遺跡 (91—373)



出土遺物

圖版 9 恩智遺跡（91—540）・中田遺跡（92—312）



出土埴輪



表面



裏面

帶金具狀製品（23）



8 (侧面)



8 (上面)



11 (侧面)



11 (上面)



17



24

八尾市文化財調査報告28
平成4年度 公共事業

八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書II

発行日 1993年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 梶近畿出版印刷

